

中・高6ヶ年を見通した古典の教材編成
(その試行的実践5)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・鹽谷 健・鈴木 信好
須藤 敬・関口 隆一・平田 知之
福田 孝

中・高6ヶ年を見通した古典の教材編成

(その試行的実践5)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・鹽谷 健・鈴木 信好
須藤 敬・関口 隆一・平田 知之
福田 孝

I はじめに

本校国語科では、学校の特色である中・高一貫校であることをどのように国語教育に生かせるかということを中心として、プロジェクトを進めている。現在は、古典教材、主として古文教材の編成を検討している。これまで、「着物」「伝統建築」の呼称・「いろはガルト」「百人一首」の定着度・「季節感」の実態、といった「古典素養に関する調査」を予備調査として実施し、試行的授業実践として、中学における『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の授業実践、季節感を主体とした単元学習の授業実践などを報告、検討してきた。古典的素養を欠いた現代の生徒にどのように古典に親しませていくかを焦点としてその教材の開発・配列の考察に努めている。今年度は、[絵巻物を用いた古文の導入授業の試み]と[入門教材として『大和物語』第一七三段を読む試み]について報告し、その検討を図り、この6ヶ年の研究をまとめることとする。

以下がその報告である。研究授業は、本校、第23回教育研究会において実施されたものである。

II 試行的授業の実践報告

(1) [中学：絵巻物を用いた古文の導入授業の試み]

(日時) 1996年11月15日(金) 第1校時

(授業者) 須藤 敬

(授業クラス) 本校中学1年C組 男子41名

(研究テーマ) 中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成(中学1年、説話と絵巻)

(教材) 絵巻物『粉河寺縁起』(中央公論社日本の絵巻5、但し詞書は元禄本で補う。)

(教材設定の理由)

本校国語科で古文学習に関する生徒の意識調査を過去に実施した際、現在の生徒は古文を読んでもある風景をイメージとして喚起しえないこと、古文嫌いは学習の初期段階で生じていること等が明らかになった(本校『研究報告』32集)。そうした問題を解消するための教材として、絵

巻物の可能性を探るのが今回の教材設定の目的である。

絵巻物の詞書は絵との相互補完関係にあるため、やや舌足らずの面があるが、むしろそこに教材としての面白さもある。即ち、従来の国語の授業では何が書いてあるのかを問題にしてきたわけだが、絵巻物の詞書は何が書かれていないのかを問題にすることができる。さらにその答えは、その時代の風俗を描いた絵の中にある点で生徒の興味・関心をひきやすいと考えられる。またこれまで絵巻物は美術方面からの考察が主たるものであったが、近年、歴史資料としての読み込み、国文学テキストとしての研究が大いに進展し、その学問的成果の蓄積ができてきたことも、教材として取り入れることのできる一要因である。

今回取り上げた『粉河寺縁起』はきわめて類型的な観音利生譚であるが、そうした類型性ゆえに当時の精神風土の地平を教えるのには適しているとも言える。また『粉河寺縁起』を単独に扱うのではなく、他の説話や絵巻と合わせた教材編成の文脈に置くことで、それぞれ単独で扱ったのでは養えない読みの視点を獲得することができる。それは今回の場合で言えば中学・高校の古文の導入教材として取り上げられることの多かった『今昔物語集』の「頼信と盗人」・「馬盗人」の二つの説話はどちらも単独で読むだけでは武士像の一面しか見えてこないが、『粉河寺縁起』を合わせ読むことで、生徒は古文における武士像を多面的に捉える視点を獲得できるし、また「飛び倉」の説話（『信貴山縁起絵巻』）と相互に関連付けることで、仏教説話の多様性を知り得るということである。

なお絵巻物はコピー印刷だけでは、その色合いが分からないので、授業においては随時教材提示装置を用いた。

（授業展開） 全19時間

- 第1時 「頼信と盗人」（『今昔物語集』巻25「藤原親孝、為盗人被捕質依頼信言免語第11」）
↓ 「馬盗人」（『今昔物語集』巻25「源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語第12」）
* 説話（集）とは何か・武士説話の位置づけ・説話の表現・武士（武士像）の描かれ方、等
↓ 「飛び倉」（『宇治拾遺物語』101「信濃の国の聖の事」・『信貴山縁起絵巻』）
- 第15時 * 仏教説話の表現・王法と仏法・絵巻物とは何か・絵巻における人々の描かれ方、等
第16時 『粉河寺縁起』について。絵と詞書を対応させつつ、全体の筋の把握。
第17時（本時） 『粉河寺縁起』第1段落の読解。
第18時 『粉河寺縁起』第2段落の読解。（画面構成の把握・堤鞆と紅の袴の象徴的意味・化身の描かれ方）
第19時 『粉河寺縁起』第3段落の読解。（当時の旅の様子・説話の結末のあり方・全体のまとめ）

(本時の計画)

- A目標 1 「長者」と「童」の人物像がいかに規定されているかを考えさせる。
2 1の考察を踏まえ、「長者の娘」の病気の理由を考えることで、当時の「罪」の概念のあり方について考えさせる。

B展開

- 1 第1段落の朗読。読み方の確認。
2 内容把握

(1)「長者」の人物像の規定。

「長者」といっても詞書だけでは、その職掌が何であるのかわからないことを押さえ、絵の中から「長者」像について探る。

- *長者の裕福な様子＝門前及び中庭の様子から虎皮を敷いた豪華な鞍を置いた馬がつながれていること、多くの産物（柿・栗・梨、伊勢えび・さざえ・こんぶ等）が運びこまれていること、さらに米俵が描かれていることを指摘する。この時、読解資料1で同様の図柄が描かれている他の絵巻を示し、その相違点を確認させる。また詞書第2段落に「蔵」「七珍万宝」の語があることを指摘し、その具体像（砂金・銀の延棒・絹の巻き物・白磁の壺、蔵出しの様子等）を絵で確認する。

なおこの作業の中で、詞書には何ら触れられることのなかったこの説話の季節が、絵で設定されていることを確認する（柿・栗・梨等の産物、柿の木・紅葉が描かれていること等）。

- *長者の暴力性＝門前の様子から、堀が掘られていること、櫓門であること、恐ろしげな武士がたむろしていること、この長者の家に来ようとしている人々が片手でもう一方の手首をつかむという服従のポーズをとっていること等を指摘する。それらのことからこの長者が武装した領主階級であることを確認する。また読解資料2を用いて、そうした人々の門前が暴力的空間であったことを指摘し、続く「童」像を考える契機とする。

(⇒『粉河寺縁起』絵①③②⑤⑥⑧・読解資料1・2)

(2)「童」の人物像の規定。

「童」も長者同様、詞書からはその人物像をうかがうことができない。長者の場合と同じように、絵から「童」像を探る。

- *童の出現の唐突な様子＝人々に恐れられていた暴力的空間である長者の家の門前に突然、一人の童が訪ねてくることの違和感を捉えさせる。
*童の姿＝草鞋を履いていること、袈裟衣を着ていること、数珠を提げていることを指摘させる。また読解資料3を用いて、当時、一般の子どもは素足であったこと、もし草鞋を履いているとすれば、それは旅の姿であることを指摘し、この童が旅する宗教者として

描かれていることを確認する。

(⇒『粉河寺縁起』絵①③④・読解資料3)

(3)「娘」の病に関する考察。

長者の「娘」は、どういう病気に、なぜかかったのかを考えさせる。

*娘の病気=この点については、詞書が細かく描写していることを指摘させ、それが当時、非常に恐れられていた皮膚病の一つであることを説明する。

*娘が病気にかかった原因=詞書は娘の病気の原因については何も語っていない。そこで読解資料3を用いて、当時の病気の原因が、何らかの罪に対する罰であったとする考えがあったことを指摘する。その上で娘の罪がその父である長者と何らかの関わりがあるのではないかということも指摘させる。

(⇒『粉河寺縁起』絵④・読解資料3)

(今回に試みについての検討)

公開授業後の研究協議会において、参加された先生方から頂いたご意見も踏まえつつ、検討を加えたい。

まず授業時間内に読む古文の分量がやや多すぎる、内容の難度が高すぎるということが感じられるかもしれない。しかしとかく古文導入期においては内容の平易さに気が用いられすぎるため、逆に古文の持つダイナミズムが失われてしまう傾向があるように思う。特に中学段階では古典文法に触れない分、むしろ細かな注釈的読みに捕らわれずに数多くの古文に触れ、その文体のリズムに慣れさせることが考えられてもよいのではないか。またこれまでの経験では、高校生は大学受験のためという現実的動機で古文をやむなく読むケースが多いのに対し、中学生は話の面白さだけで、どこまでも授業展開が可能である点も見逃せない。自分の知らない世界の話に素直に驚き、面白さを感じる年齢において古文の世界に多く触れさせておくことは、高校段階での古文学習の抵抗感を少しでも軽減することにも寄与するであろう。ただし、だからといって古文そのものだけをひたすら読むのでは、確かに中学生には負担となる場合もある。そこに絵巻物を導入する意味が出てくるのではないだろうか。近年、漫画を用いた古文学習の試みや視聴覚教材を取り込んだ授業実践が報告されているが、そうした試みの一端に、絵巻物はもっと利用されてもよいように思う。

次に生徒の主体的学習態度を育てるという観点から見た場合、今回の授業の試みは教授者の一方的な知識の伝達という面が強すぎると感じられる点について述べたい。これは生徒の主体性をどの段階で求めるかということが問題となろう。少なくとも読むためにはそれなりの技術を必要とする古文学習においては、まったくの初発の段階から生徒の主体性を求めるのは、ただアナーキーな読みをむやみに引き出す結果に終わってしまうであろう。導入段階においてはある程度の知識の習得に時間を割くのはやむを得ない。考えるべきことは、生徒の知的興味・関心をどれだ

け喚起しえる知識の伝達方法を教授者側が用意できるかということである。本校生徒の場合で言えば、本授業後、それまでまったく手を付けられた形跡のなかった図書館の絵巻物全集が閲覧されるようになった。つまりこの順序でよいのではないだろうかと考える。また今回の試みは中学1年生段階で完結するものではない。中学2年時では御伽草子を用いて、その挿し絵を読解の補助として一つの古文作品を読み通す試みを（本校『研究報告』33集）、中学3年時では本校が数年前より取り組んでいるテーマ学習において、「絵巻物を読む」という講座で、生徒自らがテーマを設定し主体的に学習活動を行う、というところまでを見通したものであることを付け加えておく。

最後に教材相互の関連付けについて述べておく。これまでの古文学習はともすると、教材が断片的で、相互に響き合うような設定がしにくかった。今回はその点も考慮した。即ち、古文の導入教材として中学教科書・高校教科書のどちらにも採録されることの多い「馬盗人」は、それだけを読んで終わってしまったのでは、武士の技量の高さを美化した面しか生徒は捉えることができない。一方において、武士の殺人集団としての側面、またそれゆえ宗教的救済がなされねばならないという側面など、多面的に押さえなければ生徒の認識は片寄ったものになってしまうだろう。そうしたこともこれからの教材編成には考えられていかねばならないと思う。

今後はまだ教材として手の付けられていない絵巻物を、授業に取り入れていく予定である。

《参考文献》

- * 『日本の絵巻』 正統全57巻（中央公論社）
- * 『日本常民生活絵引』（平凡社）
- * 『絵巻物総覧』（角川書店）
- * 『絵巻物の鑑賞基礎知識』（至文堂）
- * 『姿としぐさの中世史』（黒田日出男・平凡社）
- * 『中世の愛と従属』（保立道久・平凡社）
- * 『絵巻で読む中世』（五味文彦・ちくま書房）

『粉河寺縁起』詞書

河内國讃良の郡に長者ありけり。ただ一人持ちたる娘、身の腫み、柿のごとく腫れて、汁流れ出でて、臭き限りなかりければ、仏を造りて、据えて三年があひだ力を尽くせども、かなはであるほどに、この長者の家に置来たりて曰く、

「まことにや候ふらむ。この殿の姫君の、世にいみじき疾をして、死ぬべくおはしますと聞こゆるは、まことか、さらば、七日ばかり折り参らせむ。許し給ひなむや」

と言ふ。長者喜びて曰く、

「いかにもして助けんと、このあひだ、多くの僧達を請じ奉り、ひまなく折れどもかなはねば、捨てておきたるに、かくのたまふ。よにうれしき事なり。とくなく折らせ給へ」

とて、預けられれば、この置杖上に居て、千手陀羅尼を齋て、眼なく折る。

絵(1)①・②・③・④)

折るにしたがひて、膿血流れ出で、痛み止みもてゆく。七日といふつとめて、元のごとくきはなとなりて、うち起きて居たり。父母慕ひ出でて、この置に向かひて、

「こはいかなる仏の齋り給ひて、かくは折り、生かせ給ひつるぞ」

と言ひて、蔵を開きて、七珍万宝積み重ねて、置の前にはね出だすを見て、

「我は物を望みて折りする身にはあらず。ただひとへに世をかなしむ誓ひありて、治し難き病を癒し、人の願ひを満てむとのみかまふる身にてあるなり。さらにさらに欲しからず」

とて、ただ出でに出で給へば、娘近く近く前にひれ伏して、

「我が若は仏にこそはおはしますめれ。衆生の願を満つると思し召して、わらは幼くより、身も難たす持ちて遊びし物にて候ふ」

とて、

「腰帯一つ、紅の帯付きたるを参らす」

と言へば、

「それも無益なり」。

されども形見と言はるる事なれば取りつ。

「さてもさても君はいづくにおはしますにか」

と申せば、

「居所、いつくと定めたる事なし」。

「されども恋しくおはしますまむには参り候はむ」

と言へば、

「我は紀伊國那賀の郡に粉河と申す所に侍るなり」

と言ひて、出でておはす方を見れば、くららと失せぬ。

絵(1)⑤・⑥)

次の年の暮、一家を具して、各々装して、紀伊國那賀の郡に訪ね行きぬ。その辺りに、

「いつれが粉河、粉河」

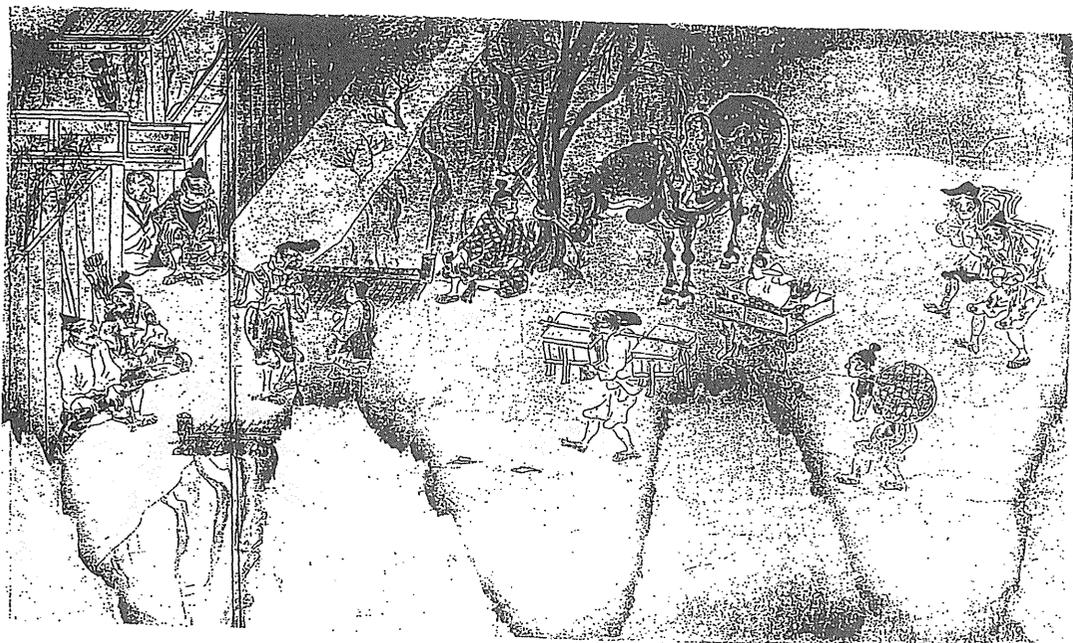
と、よろづの人に問へども、おほかた教ふる人なし。とまれ山中にこそおはしますめりて、麓に着きて訪ねありくほどに、粉を漉りて入れたるやうなる河の、白き流れ出でたるあり。それを晝びて河につきて上さまに登りもていくほどに、山に深く入りて、方丈なる庵堂あり。それまで人の通ひたる跡見ゆ。その奥には跡だにもなし。

「これにこそありけれ」

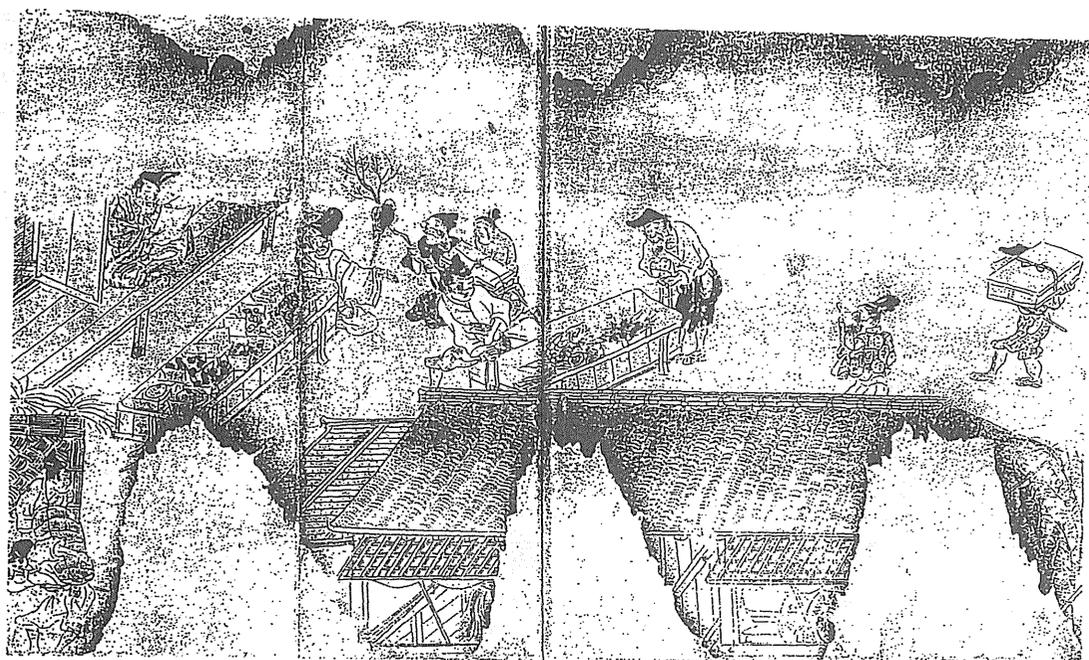
と思ひて、開けて見れば等身の白檀の千手観音きらきらと立ち給ひたり。この我参らせし、持・施無畏の御手に下げ給へり。その折、知りぬ。千手観音の置となりて、人を助け給ひけるなりと知りぬ。さて、各々出家し、居りにけり。

絵(1)⑦・⑧・⑨・⑩)

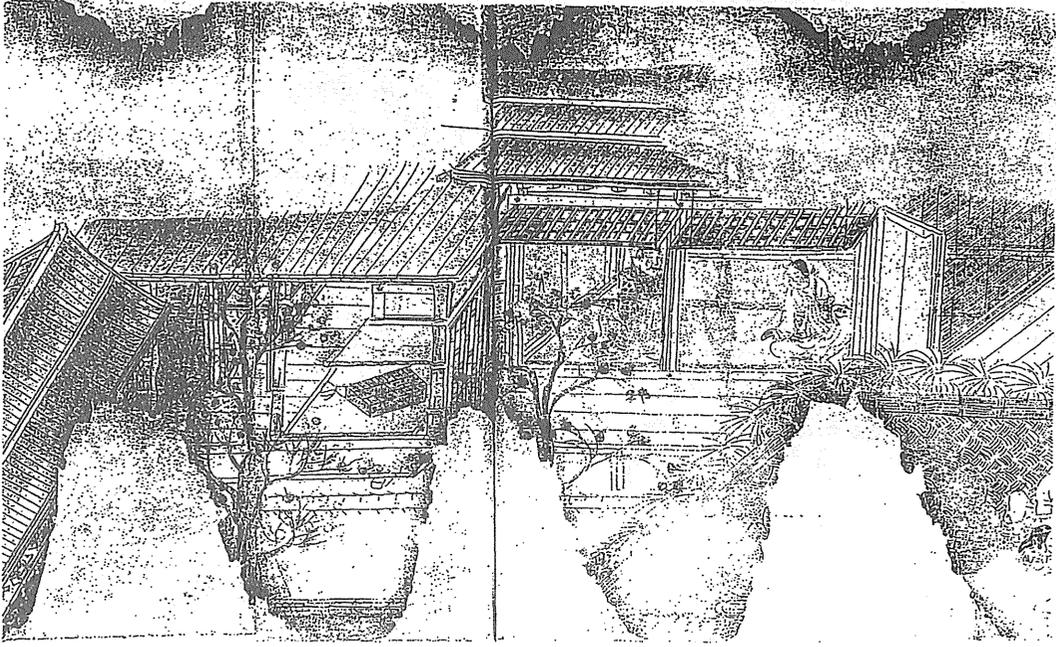
「粉河寺縁起」 絵①



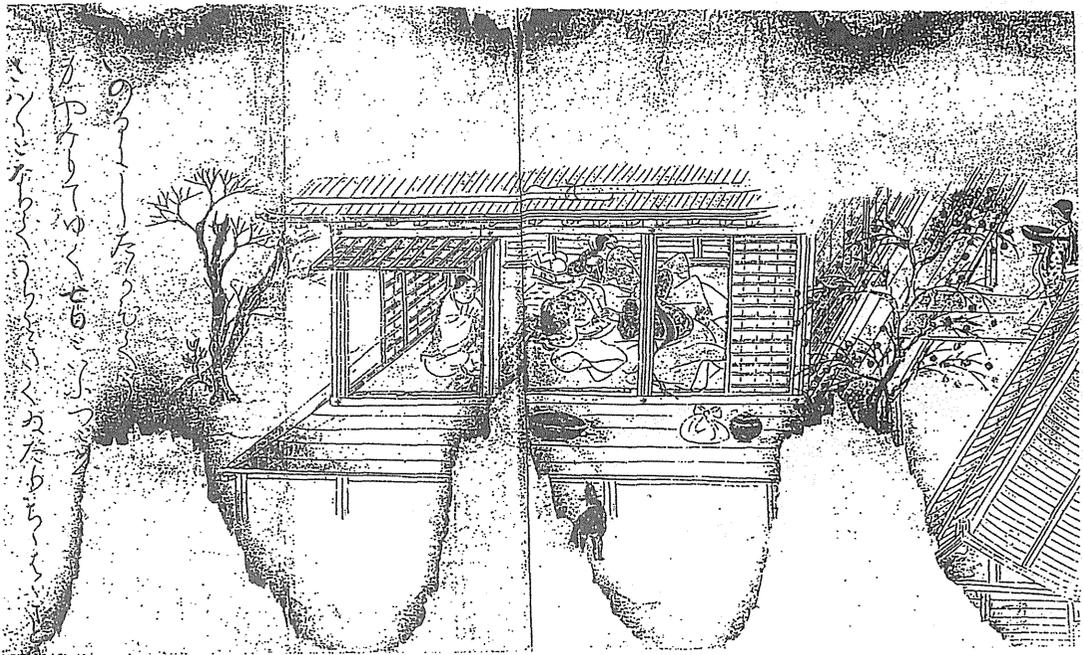
「粉河寺縁起」 絵②



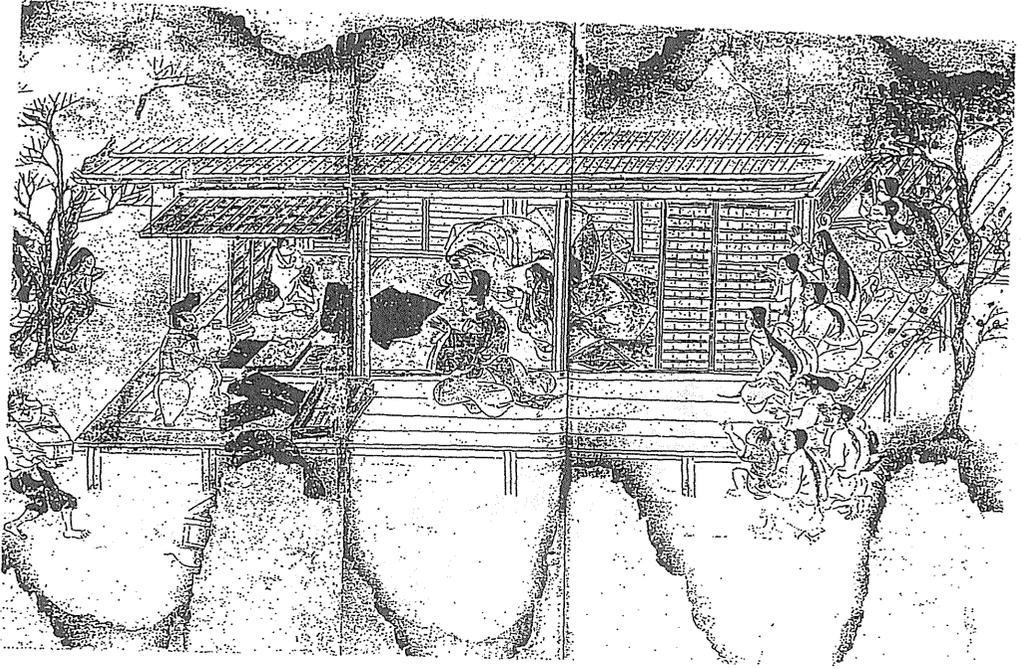
「粉河寺縁起」 絵一③



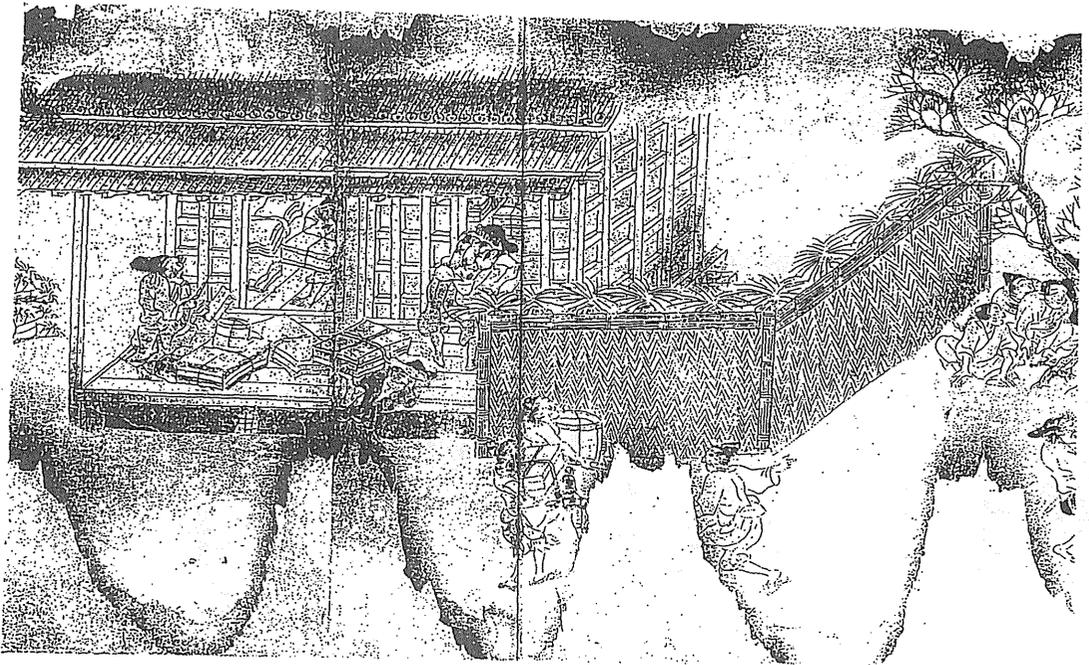
「粉河寺縁起」 絵一④



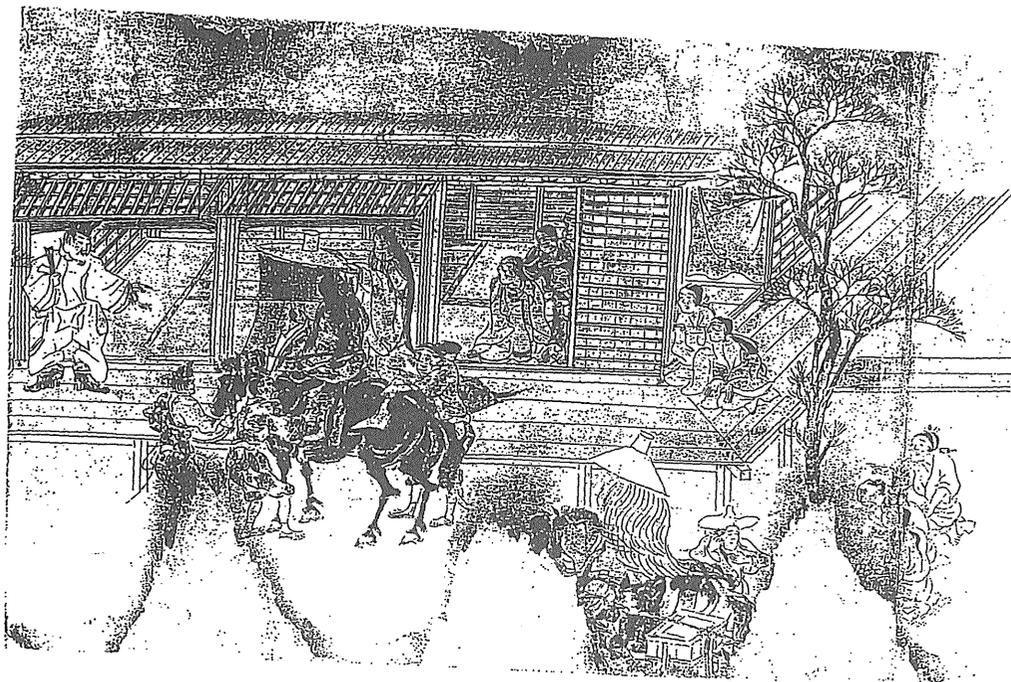
「粉河寺縁起」 絵一⑤



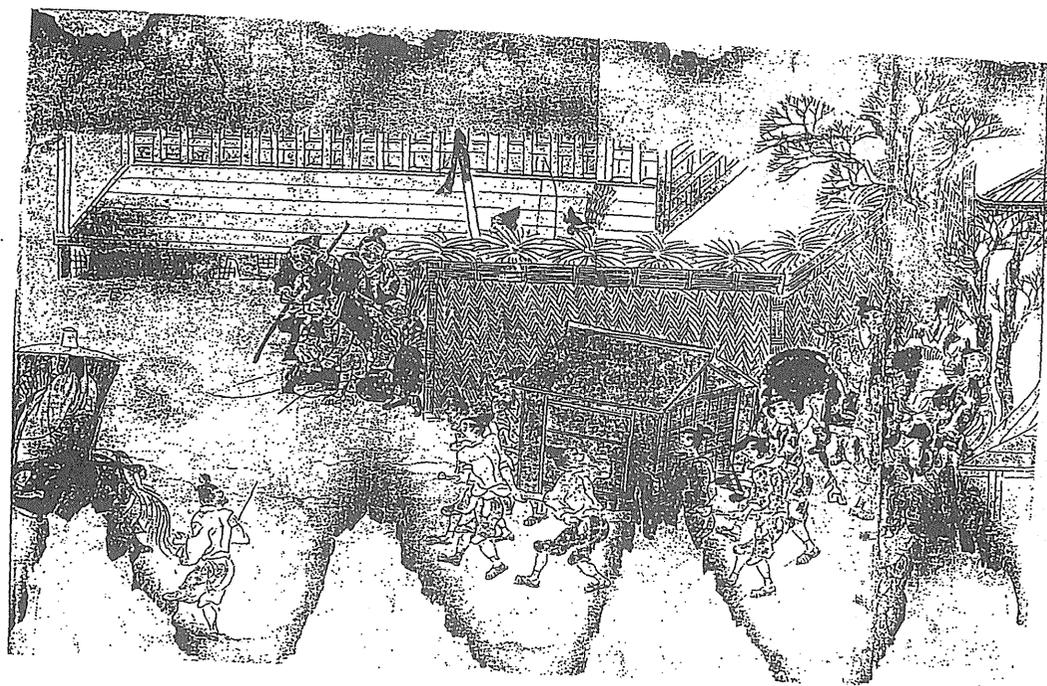
「粉河寺縁起」 絵一⑥



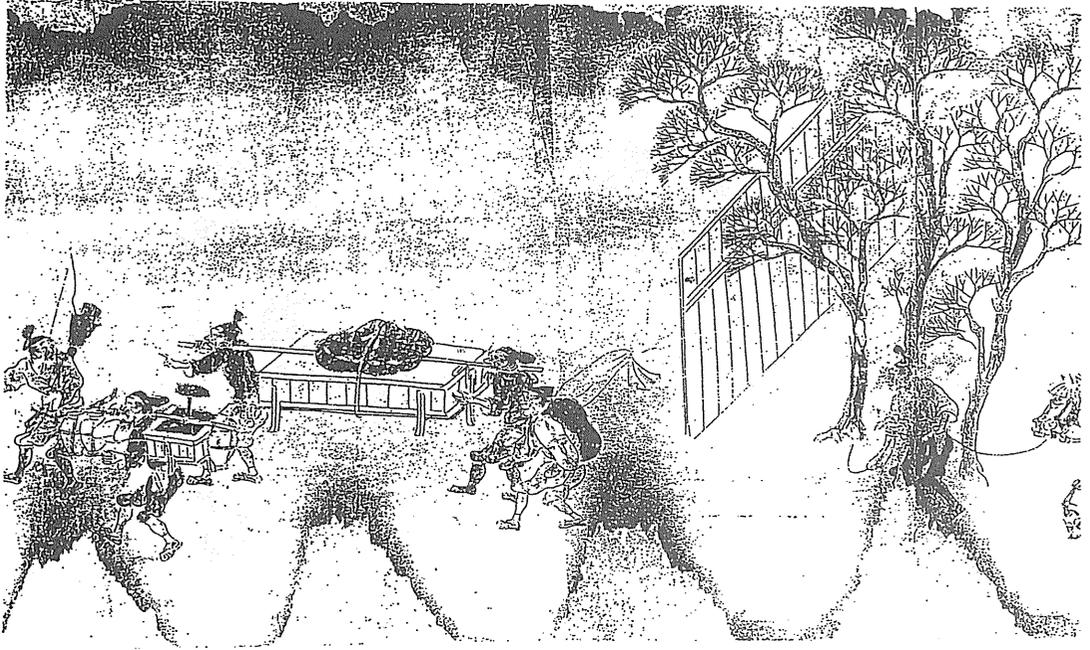
「粉河寺縁起」 絵一⑦



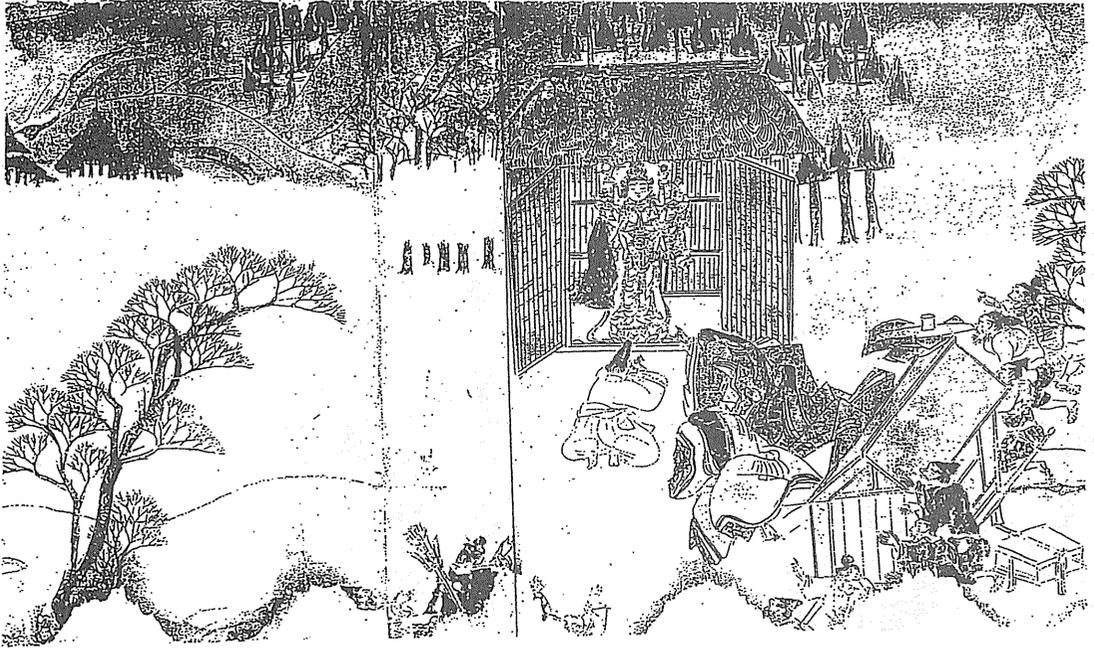
「粉河寺縁起」 絵一⑧



「粉河寺縁起」 絵一⑨



「粉河寺縁起」 絵一⑩



『粉河寺縁起』 読解資料 1

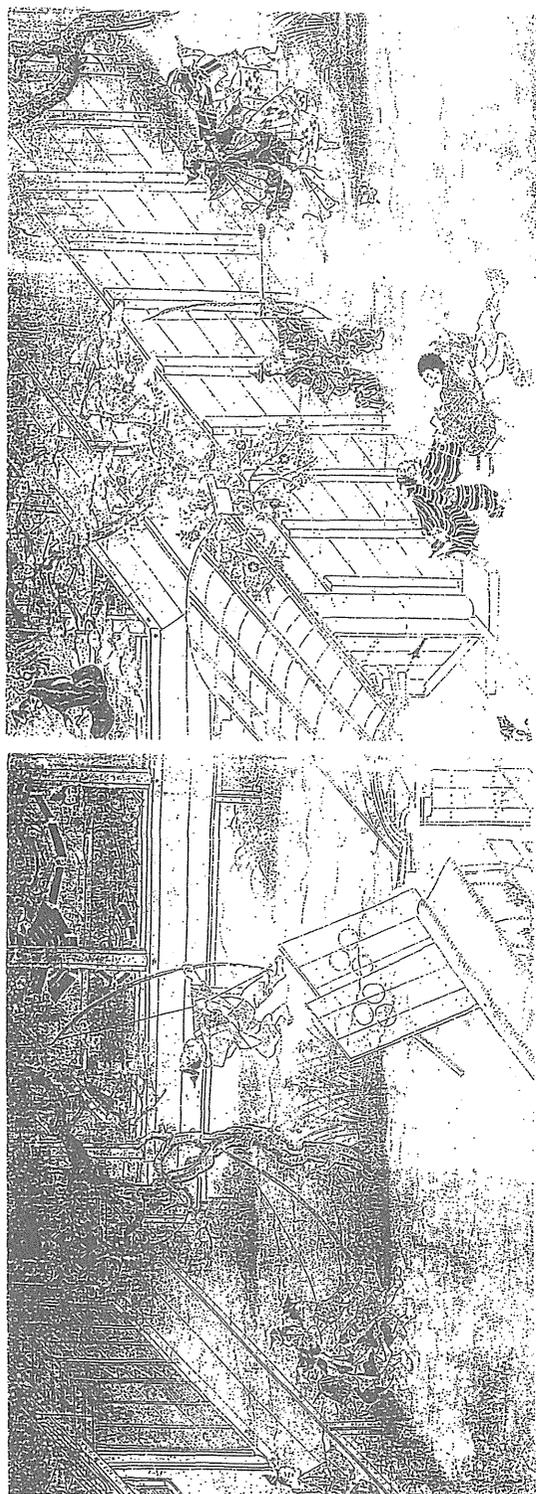
「松崎天神縁起」巻五



「石山寺縁起」巻五



『粉河寺縁起』 読解資料 2



『男衾三郎絵詞』 第二段

昔、東海道の末に、武蔵の大介といふ大名あり。その子に吉見二郎・男衾三郎とて、ゆゆしき二人の兵ありけり。

(中略)

男衾三郎、兄には一様家はりたり。
 「弓矢取る者の、家よく作りては、何かはせん。陸軍引くな、にはか事のあらん時、草飼にせんずるぞ。馬場の末に生首絶やすな、切り懸けよ。この門外通らん乞食・修行者めらは、益ある者ぞ。葦目綱にて、駆け立て連物射にせよ。若者ども、武勇の家に生まれたれば、その道をたしなむべし。月花に心をすまして、歌を歌み、管絃を習ひては、何のせんかあらん。いくさの陣に向かひて、箏を弾き、笛を吹くべきか。この家にあらん者どもは、女・女童に至るまで、習ふべくは、この身たしなめ。荒馬従へ、馳せ引して、大矢・強弓好むべし。……」

〈読解資料で用いた絵巻の解説〉

『松崎天神縁起』(↓読解資料1)
 十四世紀の成立。京都、北野天満宮の縁起を描く「北野天神縁起絵」に、防府松崎神社の創立の話を加えたもの。

『石山寺縁起』(↓読解資料1)
 十四世紀の成立。近江、石山寺の創立縁起と靈驗記を描いたもの。

『男衾三郎絵詞』(↓読解資料2)
 十三世紀の成立。関東に住む、都の生活にあこがれる兄吉見二郎と武勇一途の弟男衾三郎の兄弟の生き方を描いたもの。

『春日権現験記絵』(↓読解資料3)
 十四世紀の成立。平安・鎌倉時代における春日明神の靈驗の数々を集めて描いたもの。

『粉河寺縁起』 読解資料 3

『春日権現験記』 卷六



『粉河寺縁起』



『今昔物語集』 卷二十

「大和國の人、兎を捕らへて現報を感ずること」

今は昔、大和國、郡に住む人ありけり。心たけくして、ながくあはれびの心なかりけり。ただ好みて昼夜に生命を殺す事を業としけり。

しかる間、その人、野に出て、兎を捕らへて、生きながら兎の皮をはぎて、むくろをば野に放ちけり。その後、この人、いくばくの程を経ずして、毒の瘡身に遇して、膚乱れただれて、痛み悲しむ事限りなし。医者を呼びて薬をもって療治すといへども、かなふ事なくして、日頃を経て、遂に死にけり。これを

見聞く人、
「これはかのごとにあらず。かの兎殺せるによりて現報をかうぶるなり」とぞ、言ひそしりける。

これを思ふに、殺生は人の遊び戯れのわざなれども、生類の命惜しむ事は人にはまさるなり。しかれば、わが命を惜しむをもって、かれが心にならずらへて、ながく殺生をばとどむべし、となむ語り伝へたりとや。

(2) [高校一入門教材として『大和物語』第一七三段を読む試みー]

(日時) 1996年11月15日(金) 第2校時

(授業者) 福田 孝

(授業クラス) 高校1年4組 男子44名

(研究テーマ) 中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成

(教材) 『大和物語』第七十三段(本文は柿本獎『大和物語の注釈と研究』による)

[教材設定の理由]

古文の必修時間数が新課程では減り、本校でも高校一年生の古文授業は旧課程では週二時間を行っていたが、現在では週一時間に減っている。高校古文の入門期に、何を、どのように教えるかは以前にまして重要となってきた。教科書教材は短い教材に傾きがちであるが、短い教材をある目的に添わせて配置し関連させて扱うことはかなり困難な作業である。説話的な教材ばかりが並んでも、あるいは『土佐日記』や『伊勢物語』といった名作が配置されても、生徒は興味を抱きにくいのが実情である。比較的量があって生徒の興味を引きつけるためのストーリー展開があり、入門期にふさわしい文章を教材とする可能性もありうるであろう。以上の考え方から本学年では、一学期では『今昔物語』『讃岐の源太夫』を辞書を引くことにこだわりながら動詞を抜いっつ内容読解につとめ、夏休みには「長谷雄草子 詞書」を課題として出した。今回扱う『大和物語』第七十三段も、古文学習に必要な、基礎的知識事項(平安京の有り様、居住のあり方、和歌がどのようなときに詠まれるものであるか、月の呼称、など)を学習できる点、当時に於いてみやびな行為というのはどのようなものであるのかが学習できる点、ストーリー展開に興味を抱ける点、古文独特の言い回しに触れられる点などから入門期に読む古文教材としてはふさわしい文章であると思われる。以上が今回の教材設定の理由である。

また今回の授業計画では、写本をそのまま活字に置き直した、句読点ナシ・濁点ナシ・語注ナシの本文を、自力で読み進める作業も取り込んだ。古文の語彙が身に付いていないと難しい作業であるが、辞書を引いて句読点を補い漢字仮名交じり文に直す作業を通して、古文を読解する過程を身を以て学習することが可能となると考えている。

[授業展開] 全9時間

- 第1時 第一段落白文(翻刻文そのままというわけではないので、句読点ナシ・濁点ナシ・語注ナシの本文を、漢文に倣ってとりあえずこう呼ぶ)を漢字仮名交じり文に直す。
- 第2時 第一段落解釈。「見入る」などを説明しつつ、宗貞や「少将」の位階制における位置づけや「五条わたり」の平安京内での価値づけや寝殿造りなどの説明をする。
- 第3時 第一段落解釈。「あゆむ」「きぬ」「ひとく」などを説明しつつ、平安時代美人の条件や平安時代における和歌の働きなどを説明する。助動詞としては「たり」「む」「つ」「ぬ」

を扱う。

第4時 第二段落白文を漢字仮名交じり文に直す。

第5時 第二段落解釈。「わりなし」「なかなかかなり」「いらふ」「しつらひ」「くちをし」などを説明しつつ、旧暦の月の名や描写のねらいを説明する。助動詞としては「ず」を扱う。

第6時 第二段落解釈。「やうやう」「やをら」などを説明しつつ、平安時代の結婚観や「女くやしと思へども」を説明する。助動詞としては「べし」を扱う。

第7時 第三段落白文を漢字仮名交じり文に直す。

第8時 (本時) 第三段落解釈。「つとめて」「あるじす」「はし」などを説明しつつ、「君がため」の和歌を解釈して「いとあはれにおぼえて」をもとに雅な振る舞いの説明をする。助動詞としては「り」を扱う。

第9時 第四・五段落白文を漢字仮名交じり文に直し、「まめなり」「みづから」「めでたし」などの説明などをしてつつ、第四・五段落の解釈を行ない、全文を振り返ってのまとめを行なう。助動詞としては「き」「けり」を扱う。

(指導の目標)

- 一 古典に触れて昔の人の考え方などを読み取り、わが国の伝統文化について理解する。
- 二 古文の文章に読み慣れ、基礎的な読解力や鑑賞力を身につける。
- 三 古文学習に必要な基礎的事項を学び、基本的な助動詞についての知識を深める。

(本時の計画)

- A. 目標
- 一 『大和物語』第百七十三段の第三段落を読解して、そこに描かれている内容を把握する。
 - 二 「女の親」が歌によって状況を好転させたことを理解し、歌の持つ力を理解する。
 - 三 平安時代において歌が基本的な教養として重んじられていたこと、雅な行為がどのようなものかを理解する。

B. 展開

①本文朗読

前時の復習をし、第四段落本文を音読する。

- ・第三段落について前時に試みた漢字仮名交じり文の作業を思い出させ、本時ではその読解を行なうことを告げ、第一七三段では読解のかなめとなる部分であることを告げる。(前時の終わりにあらかじめ自宅で音読し、予習しておくよう指示する。)

②内容把握

- (a) 「つとめて」「女の入らむとするを」「ただかくて」の内容を理解する。

- ・当時の建物における様相から男女の心理に思いを至らせることが出来ることを理解させる。
- (b) 「女の親」「あるじす」「ことねりわらはばかり」といった言葉に留意しながら内容を理解する。
 - ・「女の親」は母親であることを確認させ、「ことねりわらはばかり」の「ばかり」から貴人の通常の外出の様子について触れる。
- (c) 「広き庭」「ちやうわん」「箸には梅の花盛りなるを」などに留意しながら内容を理解する。
 - ・「広き庭」にはこれまで描かれてきた没落貴族の邸である意識があり、文脈に即して理解させる。また食事の内容も通常のものでないことを理解させる。

(「ちやうわん」の理解は「茶碗」「長椀」の解釈があり得、また花びらに歌を書くことも何通りか解釈があり得るが、本章段においてはどうか考えるのが適切に注意を促す。)
- (d) 「女」の母親の和歌の内容を理解する。
 - ・上の句に自身の苦心が述べられていることを理解させ、この日の様子をよく受けた歌であることを理解させる。

(歌は「女」の母親のものであることを理解させる。)
- (e) 「いとあはれにおぼえて」はなぜなのかを考え、理解する。
 - ・まず各人に思ったことを発表させる。
 - ・光孝天皇の歌を紹介し、第二段落に「時は正月十日のほどなりけり」とあったことを思い出させ、若菜摘みの行事を紹介して母親が粗末な食事をどのように雅な食事に変化させたのかを理解させる。

(母親の歌で「庭」を「春の野」とし「菜」を「若菜」としていることに注意させる。)

③まとめ

本段の趣旨は、実は男女の邂逅を描くことにはなく、粗末な食事が歌により雅な食事へと変化するさまを述べることにあることを理解させる。

[参考文献]

柿本奨『大和物語の注釈と研究』武蔵野書院

日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館

(今回の試みについての検討)

今回の試みは、多少欲張ったものであり、二つの目的を兼ね備えさせたものとなった。比較的量があって生徒の興味を引きつけるためのストーリー展開があり、入門期にふさわしい文章を教材とする可能性と、写本をそのまま活字に置き直した、句読点ナシ・濁点ナシ・語注ナシの本文を、自力で読み進めるという点である。

前者については、入門期としては難しすぎるのではないかという批判があるだろう。特に公開

授業で扱った第三段落の部分は歌を理解する必要もあり、まだ古文を習い始めて半年ばかりの生徒に読ませるのは大変であると言う意見が有り得よう。しかしストーリー展開があり、描写が細かいことによって生徒としては無理なく内容を読解できていたように思われる。女の親が出した食事がどのようなものであり、その食事とその歌とに主人公の男がどのように感動したのかさえ把握出来ればあとは前後の文脈から出来事の把握は案外に容易に行くようである。むしろ描写が細かくない『伊勢物語』や『土左日記』などのほうが具体的なイメージを抱けず生徒はただ字面の理解に終始しがちではないかと思う。短い教材で、紆余曲折の少ない、すなわちストーリー性に乏しい教材で事細かに文法読解にかかずらわることを止め、多少とも面白く読み進めることの出来る教材を用意してやりたいということから選んだ教材であり、生徒はストーリーを楽しんでいたようである。むしろ生徒が戸惑っていたのはまったく面識の無い男女が一晩を過ごすことになるという点であり、ここは当時の結婚制度などのことを噛み砕いて説明してやらなければ誤解を招いたりしがちである。その意味で逆に結婚制度や身分制度について説明を施すよい機会となった。平安期におけるみやびがどのようなものかを知る手立てとなり、最初の設定理由に挙げたように入門期の教材としては時期を選んで読ませるのには良い文章であると考えている。

また後者の、写本をそのまま活字に置き直した、句読点ナシ・濁点ナシ・語注ナシの本文を、自力で読み進める、については必ずしもこの文章でなくてはいけないというものではない。しかし入門期にじっくりと短い文章を読みこむ時期、あるいは、文法でがんじがらめにしないで易しい古文文章に親しませて或る程度古文になれて来た時期には有効ではないかと考えている。とくに後者で有効であろう。時間数が減っている現状でこうした試みを無駄に感じる向きもあると思う。しかし生徒たちはこの作業を通して、意味が分かって始めて字を言葉として理解することが出来るという体験をし、古文を一語一語大事にして読解する訓練をしている。やがて区切り方によって異解が生じる場合や掛詞や序詞を学習するときには説明が容易になるという利点もある。また現代日本語の書記法では、助詞が文節を区切るデリミタとして、句読点が文意を区切るデリミタとしての役割を果たしていることは忘れがちであるが、そうした書記法を自覚させる契機ともなろうかと思う。変体仮名で古文を読ませる試みもありえようが、生徒に変体仮名を教える必要はないと思われ、文章内容の読解に関わる段階で止めようとしたのが今回の試みである。以上のように文章内のある箇所だけについてでもあれ、このようなことをどこかで試みておくならばけっして無駄にならないと考えている。時期や作品を選んで、今後もこの可能性は探っていきたい。

よしみねのむねさたの少将ものへゆくみちに五条わたりにてあめいたうふりければあれたるかとにたちかくれてみいるれば五けんはかりなるひはたやのしもにつちやくらなとあれとことに人なともみえずあゆみりてみればはしのまにむめいとをかしようさきたりうくひすもなく人ありともみえぬみすのうちよりうすいろのきぬこぎぬうへにきてつけたちいとよきほとなる人のかみたけはかりならむと見ゆるか

よもきおひてあれたるやとをうへひすのひとくとなくやたれとかまたむとひとりこつ少将

きたれともいひしなれねはうくひすの君につけよとをしへてそなくとこゑをかしくていへは女おとろきて人もなしとおもひつるに物しきさまをみえぬることとおもひてもいはずなりぬ

おとこえんにのほりてあぬなとか物のたまはぬあめのわりなく侍りつればやむまではかくてなむといへはおほちよりはもりまさりてなむこはなかなかといらへけり時は正月十日のほどなりけりすのうちよりしとねさしいてたりひきよせてあぬすたれもへりはかはほりにくはれてところところなしうちのしつらひ見ゆるればむかしおほえてたたまなとよかりけれとくちをしくなりにけり

ひもやうやうくれぬればやをらすへりいりてこの人をおくにもいれす女くやしとおもへとせいすへきやうもなくていふかひなし

あめはよひとよふりあかしてまたのつとめてそすこしそらはれたるおとこは女のいらむとするをたたくてとていれすひもたかうなればこの女のおや少将にあるしすへきかたのなかりければことねりわらははかりととめたりけ

るにかたいしほさかなにしてさけをのませて少将にはひろきにはにおひたるなをつみてむし物といふものにしてちやうわんにもりてはしにはむめのはなさかりなるを折りてそのはなひらにいとをかしけなる女のてにてかけり

君かためころものすそをぬらしつつ春ののにいててつめるわかなそ

おとここれを見るにいとあはれにおほえてひきよせてくふ女わりなうはつかしとおもひてふしたり

少将おきてことねりわらはをはしらせてすなはちくるまにてまめなるものさまさまにもてきたりむかへに人あればいままたもまゐりこむとていてぬ

それよりのちたえすみつかからもとふらひけりよろつ物の物くへともなほ五条にてありしものはめつらしうめてたかりきとおもひいてけり

①

〔付濁点〕

よしみねのむねさだの少将ものへゆくみちに五条わたりにてあめいたうぶりければあれたるかどにたちかくれてみいるれば五けんばかりなるひはだやのしもにつちやぐらなどあれどことに人などもみえずあゆみいりてみればはしのまにむめいとをかしようさきたりうくひすもなく人ありともみえぬみすのうちよりうすいろのきぬこききぬうへにきてたけだちいとよきほどなる人のかみたけばかりならむと見ゆるが

よもぎおひてあれたるやどをうくひすのひとくとなくやたれとかまたむとひとりごつ少将

きたれどもいひしなれねばうくひすの君につげよとをしへてぞなく

とこゑをかしくていへば女おどろきて人もなしとおもひつるに物しきままをみえぬることとおもひてものもいはすなりぬ

①

〔付濁点句読点〕

よしみねのむねさだの少将、ものへゆくみちに、五条わたりにてあめいたうぶりければ、あれたるかどにたちかくれて、みいるれば、五けんばかりなるひはだやのしもにつちやぐらなどあれど、ことに人などもみえず。あゆみいりてみれば、はしのまにむめいとをかしようさきたり。うくひすもなく。人ありともみえぬみすのうちより、うすいろのきぬ、こききぬ、うへにきて、たけだちいとよきほどなる人の、かみ、たけばかりならむと見ゆるが、

よもぎおひてあれたるやどをうくひすのひとくとなくやたれとかまたむとひとりごつ。少将、

きたれどもいひしなれねばうくひすの君につげよとをしへてぞなく

とこゑをかしくていへば、女、おどろきて、人もなしとおもひつるに、物しきままをみえぬこと、とおもひて、ものもいはすなりぬ。

①

〔漢字をあてた完成本文〕

良岑の宗貞の少将、物へ行く道に、五条わたりにて雨いたう降りければ、荒れたる門に立ち隔れて、見入るれば、五間ばかりなる檜皮屋の下に土屋倉などあれど、ことに人なども見えず。あゆみ入りて見れば、階の間に梅いとをかしく咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾の内より、薄色の衣、濃き衣、上に着て、丈だちいとよきほどなる人の、髪、丈ばかりならむと見ゆるが、

蓬生ひて荒れたる宿をうぐひすの人來と鳴くや誰とか待たむと独りこつ。少将、

来たれどもいひし馴れねばうぐひすの君に告げよと教へてぞ鳴く

と声をかしくていへば、女、驚きて、人もなしと思ひつるに、物しきさまを見えぬること、と思ひて、物もいはずなりぬ。

②

〔付濁点〕

おとこえんにのぼりてぬなどか物のたまはぬあめのわりなく侍りつればやむまではかくてなむといへばおほちよりはもりまさりてなむこはなかなかといらへけり時は正月十日のほどなりけりすのうちよりしとねさしいでたりひきよせてぬすだれもへりはかはほりにくはれてところどころなしうちをしつらひ見ゆるればむかしおほえてたみなどよかりけれどくちをしくなりにけり

ひもやうやうくれぬればやをらすべりいりてこの人をおくにもいれず女くやしとおもへどせいすべきやうもなくていふかひなし

②

〔付濁点句読点〕

おとこ、えんにのぼりてゐぬ。などが物のたまはぬ。あめのわりなく侍り
つれば、やむまでは、かくてなむといへば、おぼちよりはもりまさりてなむ。
ここはなかなかといらへけり。時は正月十日のほどなりけり。すのうちより
しとねさしいでたり。ひきよせて、ゐぬ。すだれも、へりは、かはほりにく
はれて、ところどころなし。うちのしつらひ見ゆるれば、むかしおぼえてた
たみなどよかりけれど、くちをしくなりけり。

ひもやうやうくれぬれば、やをらすべりいりて、この人をおくにも入れず。
女、くやしとおもへど、せいすべきやうもなく、いふかひなし。

②

〔漢字をあてた完成本文〕

男、縁にのぼりてゐぬ。「などが物宣はぬ。雨のわりなく侍りつれば、や
むまでは、かくてなむ」といへば、「大路よりは漏りまさりてなむ。ここは
なかなか」といらへけり。時は正月十日のほどなりけり。簾の内より齒差し
出でたり。引き寄せて、ゐぬ。簾垂も、縁は、蝙蝠に食はれて、所々なし。
内のしつらひ見入るれば、昔おぼえて畳などよかりけれど、口惜しくなり
けり。

日もやうやう暮れぬれば、やをらすべり入りて、この人を奥にも入れず。
女、悔しと思へど、制すべきやうもなく、いふかひなし。

③

〔付濁点〕

あめはよひとよふりあかしてまたのつとめてぞすこしそらはれたるおとこは女のいらむとするをただかくてとていれずひもたかうなればこの女のおや少将にあるじすへきかたのなかりければことねりわらはばかりとどめたりけるにかたいしほさかなにしてさげをのませて少将にはひろきにはにおひたるなをつみてむし物といふものにしてちやうわんにもりてはしにはむめのはなさかりなるを折りてそのはなびらにいとをかしげなる女にてにかけり

君がためころものすそをぬらしつつ春ののいでてつめるわかなぞ

おとここれを見るにいとあはれにおほえてひきよせてくふ女わりなうはつかしとおもひてふしたり

③

〔付濁点句読点〕

あめはよひとよふりあかして、またのつとめてぞすこしそらはれたる。おとこは、女のいらむとするを、ただかくてとていれず。ひもたかうなれば、この女のおや、少将にあるじすへきかたのなかりければ、ことねりわらはばかりとどめたりけるに、かたいしほ、さかなにしてさげをのませて、少将には、ひろきにはにおひたるなをつみて、むし物といふものにして、ちやうわんにもりて、はしにはむめのはなさかりなるを折りて、そのはなびらに、いとをかしげなる女にてにかけり。

君がためころものすそをぬらしつつ春ののいでてつめるわかなぞ

おとこ、これを見るに、いとあはれにおほえて、ひきよせてくふ。女、わりなうはつかしとおもひて、ふしたり。

③

〔漢字をあてた完成本文〕

雨は夜一夜降り明して、またのつとめてぞ少し空晴れたる。男は、女の入らむとするを、「ただかくて」とて入れず。日も高うなれば、この女の親、少将に饗すべき方のなかりければ、小舎人童ばかりとどめたりけるに、堅い塩、肴にして酒を飲ませて、少将には、広き庭に生ひたる菜を摘みて、蒸物といふ物にして、ちやうわんに盛りて、箸には梅の花ざかりなるを折りて、その花びらに、いとをかしげなる女の手にて書けり。

君がため衣の裾を濡らしつつ春の野に出でて摘める若菜ぞ

男、これを見るに、いとあはれにおぼえて、引き寄せて食ふ。女、わりなうはづかしと思ひて、臥したり。

④

〔付濁点〕

少将おきてことねりわらはをはしらせてすなはちくるまにてまめなるものさまさまにもてきたりむかへに人あればいままたもまぬりこむとていでぬ
それよりのちたえずみづからもとぶらひけりよろづの物へどもなほ五条にてありしものはめづらしうめでたかりきとおもひいでけり

〔付濁点句読点〕

少将、おきて、ことねりわらはをはしらせて、すなはちくるまにて、まめなるもの、さまさまにもてきたり。むかへに人あれば、いままたもまぬりこむとていでぬ。

それよりのち、たえずみづからも、とぶらひけり。よろづの物へども、なほ五条にてありしものは、めづらしうめでたかりき、とおもひいでけり。

〔漢字をあてた完成本文〕

少将、起きて、小舎人童を走らせて、すなはち車にて、まめなる物、さまさまに持て来たり。迎へに人あれば、「今またも参り来む」とて出でぬ。
それよりのち、絶えずみづからも、とぶらひけり。よろづの物食へども、なほ五条にてありし物は、めづらしうめでたかりき、と思ひ出でけり。

Ⅲ まとめとして

まず、六年間に渡って中高6ヶ年を見通した古典の教材編成を考えてきた、その大体を以下に掲出する。

1991（平成3）年度

古典学習についての意識調査－1977年度の意識調査との比較－

古典学習の前提となる素養調査（1）－住居・服飾の名称－

古典学習の前提となる素養調査（2）－いろはガルト－

1992（平成4）年度

古典学習の前提となる素養調査（3）－『小倉百人一首』－

試行的授業の実践報告 [中学2年生－御伽草子「浦島太郎」－]

試行的授業の実践報告 [高校2年生－『源氏物語絵巻』を利用した『源氏物語』の学習指導－]

1993（平成5）年度

古典学習の前提となる素養調査（4）－『古今集』による季題－

試行的授業の実践報告 [中学1年生－『万葉集』－]

試行的授業の実践報告 [中学2年生－『古今和歌集』－]

試行的授業の実践報告 [中学3年生－『新古今和歌集』－]

1994（平成6）年度

試行的授業の実践報告 [中学3年生－季節感を喚起する古典の学習指導－]

試行的授業の実践報告 [高校2年生－季節感を主とした古典の学習指導－]

1995（平成7）年度

試行的授業の実践報告 [中学2年生－古典に親しむための『徒然草』の教材化－]

試行的授業の実践報告 [高校2年生－季節感を喚起する古典の学習指導－]

1996（平成8）年度

試行的授業の実践報告 [中学1年生－絵巻物を用いた古文の導入授業の試み－]

試行的授業の実践報告 [高校1年生－入門期教材として『大和物語』一七三段を読む試み－]

すなわち、15年前に行なわれた意識調査と同様の意識調査を初年度に行ない生徒の古典離れ・古典嫌いの実態がどのようなものであるのかを把握した上で、住居・衣服あるいはいろはカルタ・百人一首・季題といったものを通して生徒の日常の実態や意識がおよそ古典を理解するには程遠いところにあることをも把握し、その上でこれからの古典教育や古典教材をどのように考

えていくのが妥当かを手探りながら試みてきたのがこの6年間の教材編成を考える研究であった。従来の教科書教材を念頭に置きつつも具体的にその適否を検討する方向は採らずに、今の生徒の現状を鑑みてどのような古典教材の可能性があり得るのかを試行的実践として提示してきた。(古典の教材編成と表題を掲げながら最終的に漢文を扱えなかったことは残念であった。後でも触れるが古文においてもこの実践途中で授業数が減少し、そのために古文領域をどう考えていくのかで手一杯となってしまった。機会を設けられればいずれ検討したいと思う)。生徒が古典的素養を著しく欠いており、古典教育の意義そのものが大きく問われようとしている現代においては、もはやこれまでのように文法事項を中心として古文を現代語に置き換えるだけでは古文に対する興味関心を生徒に喚起することは難しい。古典的素養を生徒にどのように喚起し植えつけていくかを重視した結果である。

大きな方向性として、二つのことを立ててきたように思う。

一つは古文を読んでその世界に親近感を抱かせるために絵巻物を導入する方向性である。御伽草子「浦島太郎」・『源氏物語絵巻』を利用した『源氏物語』の学習指導・絵巻物を用いた古文の導入授業の試みがそれにあたる。素養調査などを見て知られるようにマンションなどに住む生徒は畳や襖障子といったものにまったく触れないで成長している。古文で描かれる世界自体が風景として脳裡に思い浮かばないのである。古文の世界で描かれる家屋や風景を視聴的に提示することを通してイメージを喚起させて文章を読むことをさせつつ、どのように絵巻物が描かれているのか、また作品の文章には何が述べられていないのかといったことまでをも扱うことが出来る。その意味では近年報告されている生徒に漫画を描かせるといった方向性とは随分に違う試みであることを理解いただきたい。

またもう一つは季節感を主題とした単元学習を組むことで伝統文化への意識を喚起させる方向性である。季節感を喚起する古典の学習指導(中・高とも)・季節感を主とした古典の学習指導がそれにあたり、古典に親しむための『徒然草』の教材化・入門期教材として『大和物語』第一七三段を読む試みも実は季節感に関連した授業の設定であった。こちらは生徒が日常生活の中では喪失しているように思われる季節感を、意識的に相対化させながら古文の世界で重んじられてきている季節感を味わわせる単元学習の試みである。ただ単に文学作品として作品を読解するのではなく古典の世界の伝統を理解させようとした試みである。単元学習として複数の作品を扱うと、各作品の個性を殺して共通面のみを目を向けがちになるが共通面を提示しつつも各作品の個性をも失わぬように心掛けて実践を行なったつもりである。

さて、試行された授業を該当学年に配当して示し直すならば以下の様になる。

- 中学1年生 - 『万葉集』 -
- 絵巻物を用いた古文の導入授業の試み -
中学2年生 - 御伽草子「浦島太郎」 -

- 『古今和歌集』 -
- 古典に親しむための『徒然草』の教材化 -
- 中学 3 年生 - 『新古今和歌集』 -
- 季節感を喚起する古典の学習指導 -
- 高校 1 年生 - 入門期教材として『大和物語』一七三段を読む試み -
- 高校 2 年生 - 『源氏物語絵巻』を利用した『源氏物語』の学習指導 -
- 季節感を主とした古典の学習指導 -
- 季節感を喚起する古典の学習指導 -

上述した二つの方向性ととも、古文に親しませ馴染ませる段階、古文読解に取り組む段階、読解した上でその作品世界を鑑賞する段階と、と学年を追って進行するように配慮しているつもりである。

その大体を言えば以下のようなになる。中学での実施は、高等学校などでよく行なわれているような、文法事項を中心とするような授業は行なわない。とにかく古文に興味を持たせて読ませることが大切だと考えている。6年間を通して考えるならば中学の古文学習は高校のそれをただ学年を落としてスケールダウンしたものではなく、高校に入ったときに違和感・嫌悪感なく古文に接せられるための準備段階と考えている。むずかしい語法は後回しにして好奇心・興味を抱かせられれば良いのではなかろうか。短い笑話のような教材で事足りるとするのではなく、文章が多少長くてもストーリーを辿って面白い、とか、重い内容でも内容を読むと興味が湧くと云った教材を用意することを心掛けている。現在わが校では高校入学時に本校中学から進級してくる120名に加えて40名の新規入学生を迎えており、純粋な意味での中高一貫校とはいいがたい実情にある、だからこそ高校からの新規入学者が困らぬように不用意に中学生の時期に文法事項を教え込めないのが実態である。そのためにも中学時には文法に手を出さず、古文を読む楽しさを重視しているのである。

高校では読解をも考慮して教材を選ぶことを心掛けている。高校1年の時期は、古文読解のための基礎学力育成の時期と考えられる。そのためには或る程度の量を読みこなす必要がある。文法事項をじっくり教えるためのさほど長くない文章を読む機会と、読み慣れるためのごくごく短い文章やストーリー展開の楽しめる長めの文章を文法にこだわらず読んでいく機会と、両方を授業で用意してやる考え方が必要だと思う。例えば1学期は文法にこだわらず短編を数多く読む、2学期は文法事項をしっかりとこなして文章を読む、3学期はストーリー展開のある長い文章を読んで読解に自信を付ける、といったように。教科書教材の考え方は、有名作品あるいは説話作品の短い文章を、文法事項をこなしながらじっくり深く読み込む方向だが、それでは読み慣れる機会を与えてやれない。生徒が知っている文学史上における著名な作品を読み進めることは高校2年で行ない、そこで高校一年生で学習した事項が読解に役立つことを知り、鑑賞に足を踏み込む、

といった考え方を取ったほうがよいと思う。高校3年では、高度な文化的事象を含んだ学習内容を持たせることをねらうべきであろう。現在の古文教育は文章読解に比重を懸け過ぎているように思われる。入試においてどのような文章に接しても読める読解力を付けてやりたいという配慮が払われすぎて、仏を作って魂入れずではないが、読解の練習をすることを重視しすぎているように思われる。むしろ内容に興味を持たせることで積極的な学習態度を備えさせることが理想であるはずであり、古典の教育を通して、伝統とは何か、日本的な感性とはどのようなものなのか、といった文化的事象に立ち入ることを心掛けたいと考えているのである。

以上のような学年進行に従ったカリキュラムの大体を考えながら実践を行ってきたわけだが、同時にこれから古典の授業を考えていこうとするならば次のような点に留意する必要を実感している。

まず一点目は、これまでのような、教科書に依存するだけの授業では古典の授業を成立させることは難しいかもしれない、という点である。実践自体も従来の教科書教材からは離れた教材を試みたわけだが、今まで述べたように教科書教材は有名古典作品に傾きがちであり、取られた文章も短いものが多く、教材相互の関連づけに乏しい。もっと授業者自身で工夫しないと生徒の興味を引く授業を成立させにくいと考えている。例えば、中学生に『今昔物語集』に載る「わらしべ長者」を読ませる。知っている子と知らない子が居る、知っていてもうろ覚えの可能性がある、あるいは筋の展開が彼らの知っているお話とは異なる可能性がある。プリントとして4枚に分けて時間毎に一枚ずつ配布して授業を展開するならば、ストーリーを辿る面白さがあるので、教科書に全文が載っていたり全文をプリントで一挙に配って授業を行なうのとは生徒の反応はまるで異なる。これは教科書を用いていたのでは決して出来ない授業展開である。こうした展開をいつも行なうのは無理かもしれないが、ときに投げ込み教材として、使用しているのとは異なる教科書から文章を持ってきたり、古典作品の単行本から教材をとったりすることで、同様のことは可能となる。わらしべ長者を範にとるならば、この作品を扱うだけでも、穢れの問題・絶対敬語・相対敬語の問題・古文の疑問文作成法・平安京の地理的説明・仏教を広めるために担わされたであろう説話としての側面等々、古文の言語的側面や文化的側面に、文法だけでなく、生徒に興味を持たせながら授業を施すことは可能である。それが古文を読む楽しさにつながっていけばよいのだろう。

二点目として古文教育に修養は必要と考えている。有名作品の冒頭の暗誦とか和歌の暗誦などを場面に応じて行なう必要を感じている。小・中・高の時期はある程度修養を行なう期間と見なして良いと考えている。国語の授業時数は減少傾向にあり、とても余裕を持った生徒主体の授業を実施していく事は出来ない。一瓢を携えて春土手に遊ぶ式の暗誦学習は読み慣れのためにも是非必要であるし、伝統の考え方・伝統の感受性を教え導くためにも実施を心掛けている。

三点目。現在、本校では高校一年次で古文を1単位、高校二年次に2単位、高校三年次に選択で古典Ⅱの中の1単位と古典購読2単位で、授業を行なっている。上述した一年次に読み慣れる

というのは時間的に無理な点が多いので、中学で意識的に古文を多く読ませている。しかし教材の系統性による効率性を考える必要性を今まで以上に強く感じている。例えば『伊勢物語』は著名作品として教科書に必ず取られるが本当にこれが古文を教えるのに妥当かどうかは検討したほうがよい。敬語が余り使われていないので敬語を扱わないで生徒に読ませることは可能だが、文自体が省筆で含蓄のある書き方をするためにこれを読む楽しさを生徒に伝えるのは楽なことではない。文学作品として有名だから読む、ではなく、語法のことや内容の妥当性といったことをよく吟味した上での教材の精選が今後ますます問われることとなろう。

以上を、6年間の素養調査・実践報告に基づくまとめとしたい。まだまだ検討すべき要素は多く、同様の試みを今後も日々の実践のなかで試みていくつもりである。古文については教科書教材から離れた実践報告は少ないのでこの6年間の実践を活用していただきたい、と同時に多くの御叱正を御願いたいと思う。